「学び・対話し・分かち合う」研究会シリーズ

シェアラボれぽーと

追手門学院
成熟社会研究所

SHARE LAB. report

vol.4
すまう

「シェアラボれぽーと」はシェアラボの内容や話し合ったコトをみんなにお知らせするニュースペーパーです

2015.2.25. 水 /14:30-18:30

会場：大阪くらしの今昔館／豊崎長屋

●トークゲスト●

谷　直樹 氏
（大阪くらしの今昔館 館長
大阪市立大学名誉教授）

加茂みどり 氏
（大阪ガス エネルギー・文化研究所
主席研究員）

発行：追手門学院 成熟社会研究所

シェアラボってなに？

「シェア（分かち合う）」「ラボ（研究）」は、共通テーマを軸に**人と社会のこれから**を考える研究会シリーズ（年間 計５回を予定）。

学院内外からのゲストによる講演＋みんなでギロンするワークショップを行います。

毎回、身近な動詞をテーマに、現状とこれからを考えます。

世代や専門の垣根を越えて、みんなで学び・対話し・分かち合うことで、新しい発見と気づきがきっとある！

ドリンク片手にリラックスした雰囲気で行い、**関心のある方はどなたでもご参加いただけます！**

プログラム①
館長とゆく今昔館ツアー！！

今回のシェアラボはいつもの会場を飛び出して、これまでとちょっと違う構成でお届けしました。最初のプログラムは、**ゲストである谷直樹先生が館長を務める「大阪くらしの今昔館」を谷館長自らが案内してくださるツアー**です。

めくるめく今昔なにわの空間をテンポのいいトークで案内される館長！　江戸時代の大坂の町並みや、近代大阪のジオラマなどを楽しみながら昔の暮らしを学びました。

※大阪くらしの今昔館とは…2001.4 にオープンした「住まいの歴史と文化」をテーマにした日本初の専門ミュージアム。実物大の町並み展示で江戸期の大坂を復元。最寄は地下鉄・阪急「天神橋筋六丁目」。

プログラム②
「すまう」を考える@豊崎長屋

後半の研究会の会場は、**大正期に建てられた豊崎地区の長屋**をお借りしました。まったく異なる２つの**「住みつづける」**ための住宅について、ゲストによる講演が行われました。１人目は、この長屋の改修に携わられた谷先生、２人目は、大阪ガスの実験集合住宅NEXT21 の居住実験に関わられている加茂みどりさん。講演の詳細は後半のページでお届け！

プログラム③ アンケート

あなたの「すまいへのこだわり」を おしえてください！

終了後のアンケートの一部をご紹介！
この後でご覧頂く講演内容も少なからず影響を与えたような…

風通しと日当たり。クーラー無くても夏は涼しいのがいい。

自然素材のものがいい。時がたっても自分で修理できる。

家の中からも季節を感じられるように、窓から庭や空、山が見えること。

近くに散歩ができるコースがあれば野鳥探しをしながら歩きたい！

自分だけの部屋を持って自由に空間を使いたいなぁ。

過度なバリアフリーではないこと。そうすれば暮らしの中で心も身体も程よく鍛えることができる。

地震や水害への安全性のために、地盤とか海抜なんかもチェック要。

大きいお風呂が好きだから銭湯の近くに住みたい！

とにかく便利なことかな。駅、スーパー、病院、などの近くがいい！

外で食事ができるくらいの広々としたバルコニーがある家を希望！

気分や季節や家族の都合で、間取りの変更が可能な住まいだったら魅力的だな。

シャワーだけだと疲れが取れないから、お風呂には浴槽を。

屋外と屋内をつなぎ、外を感じられるような、縁側やサンルームがあると気持ちいい。

いきている長屋　谷　直樹 氏

「豊崎長屋は大正生まれ」

○この家（主屋）が梅田の北ヤードから移築されてきたのが大正 10 年。大阪は元々長屋文化があり、**主屋と長屋がワンセットになっているのがここ豊崎の特徴**です。

○８畳と６畳で続き間となっているので、屏風で上手く仕切って使うことも。床の間や書院もついています。縁側には庭、奥には蔵があり、その奥に見えているのが北長屋。部屋の欄間のデザインをよく見れば住吉大社の太鼓橋などが描かれています。これは大阪の欄間師が作ったものです。

○長屋の住人は戦前から住んでおられる方が多く、生まれ育ち、子育てして、年をとり、70 ～ 80 年ここにいます。それだけ長く住むということは、**この土地に愛着があったということ、そして家主と借家人の関係が良好だったということ**です。

○昔、路地をアスファルト舗装する話があったときには、当時の当主のこだわりで土の道を残したそうです。

「豊崎長屋の改修あれこれ」

○家主さんと相談して、大阪市大の学外授業として改修に関わることになり、谷研究室と竹原研究室の学生が壁量実測や工事などに参加しました。冬場に建具やガラスを洗う姿を地元の人たちが見て「そこまでやるなら建物を残す価値があるな」と。そうして地域の信頼を少しずつ築いていきました。

ゲストプロフィール

谷　直樹 氏（たに・なおき）
（大阪くらしの今昔館 館長
大阪市立大学名誉教授）
京都大学大学院工学研究科修了、大阪市立大学生活科学研究科教授を経て、現職。2008 年 日本建築学会賞受賞（大阪市立住まいのミュージアムの企画と運営）、2010 年 日本建築学会教育賞受賞（大阪長屋の再生ーストック活用力育成教育プログラム）、『町に住まう知恵』（平凡社 /2005 年）『いきている長屋』（共著 / 大阪公立大学共同出版会 /2014 年）。

○改修時には様々な工夫をしました。例えば耐震補強のために入れた木製フレームを棚として使用し、あえて見せる仕様でデザインに生かしています。
○欄間は汚れを磨き取り、出格子は中古建具を京都で購入して使いました。**昔の建具は質がよく使い回しができて**重宝します。今、一から職人が作ろうと思ったらすごい値段になります。中古建具市場の必要性があるのではないでしょうか。

「長屋のくらし、季節の暮らし」

○これ（塀のまわりにぐるりと幕が張った写真）は主屋の晴れ姿。家主の奥さんがお嫁に来られたときにこのように幔幕（まんまく）を張ったとのことです。
○掛け軸を季節でかけ替えたり、夏になると夏の建具が入るなど、**この家には「季節の暮らし方」が残っています**。
○参加した学生たちは、**改修を経て日本建築の持つ面白さにはまり、**卒業する頃には人に貸すのがもったいなくて自分が入居するといった事例もありました。
○大阪は東西方向に風が吹くので、それを無視して風を遮るように壁を入れると家が傷んでしまいます。そういった日本建築の特徴も考えながら改修したことで、職人に対してもひとつのモデルとなったのではないかと思っています。
○ここは、表格子の長屋、高塀と前庭がある長屋など、長屋のオンパレードです。理由は、年代がちょっとずつ違っているからだけでなく、おそらく借家人のニーズを考えた結果だと思います。
○長屋改修で難しいのは、それぞれ持ち主が違っている場合。全員の意見がまとまらないと改修できません。ここは持ち主が一人なのが幸いしました。

「登録文化財として…」

○吉田家住宅（主屋、土蔵、長屋）は平成 20 年に**国の登録有形文化財に登録**されました。文化財としてただ残すだけではなく、このようにいろいろなイベントや会合で使ってもらったりしています。

●登録有形文化財の基準は「築後 50 年以上」の歴史的建造物だそう。
豊崎長屋の主屋はもうすぐ百年！　百歳のお祝いをぜひして頂きたいです！

変化する集合住宅 加茂みどり 氏

「実験集合住宅 NEXT21 概要」

○NEXT21 は大阪ガスが建設した、**社員が住んで居住実験をする集合住宅**です。６階建ての鉄筋コンクリートの建物で、スケルトン・インフィル住宅（100 年以上の耐久性を持つ柱や梁などの骨組みの部分と、短期的な使用を想定した内装部分から構成され、水周り等の内装の変更が自由自在）になっています。

○1994 年から実験の第１フェーズがスタートし、ガス設備等の実験とともに居住者の住まい方を調査。５年ごとに居住者を入れ替えて現在第４フェーズを迎えました。

「NEXT21 の研究、はじまる」

○当初は「住み方研究」といっても、こちらは素人でした。毎年、居住者宅を一軒一軒まわってヒアリングしたり、写真を撮り家具の配置を記録しました。その後、研究を形にしたいと、成果を論文としてまとめることにしました。

「実験住宅プラン」

○**事例：子育て家族の希望を反映したリフォーム**。子育て中の家族の関心事は「子どもの遊び」「子どもの安全性」「子どもの存在と家事・接客などの日常生活の両立」の３つに集中。遊ぶ子どもをキッチンから見守れる一体的な住空間や、来客時に子ども部屋をサッと仕切れる引き戸が好評でした。

○**事例：エンプティネスト（子供が独立したあとの夫婦）の家**。当初はプライベートスペー

ゲストプロフィール

加茂 みどり 氏（かも・みどり）
（大阪ガス エネルギー・文化研究所 主席研究員）

大阪ガス入社後、リビング事業部を経て、現職。京都大学博士（工学）、神戸芸術工科大学・神戸松陰女子学院大学非常勤講師。一級建築士。著書に、『住宅の近未来像』（共著 / 学芸出版社 /1996 年）、『都心・まちなか・郊外の共生』（共著 / 晃洋書房 /2010 年）。大阪ガス実験集合住宅 NEXT21 での居住実験を担当。

スとパブリックスペースのある住戸として設計されました。しかし、子供が巣立った後は、全体が夫婦２人のプライベートスペースに。そして、夫と妻の「パーソナル」なスペースが、住戸内のあちこちにみられるようになりました。

○**事例：中間領域のある家。**土足で住戸の周囲の土間をぐるりと歩くことができる家、縁側のある家などを作りました。外部空間と親和性の高い日本の居住文化を　現代の集合住宅に復活させようとする試みです。

○**事例：コンペによる改修住戸。**４Ｇハウスは、小規模多世帯の共同生活への提案として、４世代にわたる女性４人が住む家。プラス１の家は、当初は夫婦と30代娘が住む家ですが、プラス・ワンの部屋に単身親世帯が住んだり、仕事部屋として使ったり、賃貸として貸し出せるという設定で、それぞれ設計されました。これからの多様な家族と住まいのあり方を考えた住宅です。

「住むことは、生きること」

○日本の住宅研究の第一人者である西山夘三先生の偉業をテーマにしたシンポジウムで、住田昌二先生（住宅政策・住宅計画学の研究者）が「西山先生が住み方研究をされていた時代背景を理解してほしい」とおっしゃいました。戦後、「今日まで生きながらえたこの命を何とか明日につなげたい」と、多くの人が考えた時代に「最低限、寝食分離だけは必要」と主張された西山先生の研究。それを聞いて**「住むことと生きることは同じなんだ」**と思うようになりました。

○高齢者の住宅を考えるときは介護する人の逃げ場所が必要です。単身者の場合は、一緒に住む家族がいない状況で、自分の気持ちがダウンしている時に自力で立て直すことが必要です。買い物なども自分以外の誰もしてくれません。すべてを自己決定する、それはとてもしんどい状況です。

○**生きる活力を再生産する住宅はどういうものか、**それをこれから考えていかねばならないと感じています。

●これからは「一人ひとりの幸せ」を考えて個人化に対応することが「家族の幸せ」になるのでは、とのことでした。家のこと、もっと考えていきたいですね！

まとめ、のようなもの。

「衣・食・住」と言いますが、家庭科の授業では「衣」「食」は実習があっても、「住」についてはほとんど教科書での座学のみで、生活との身近な接点をあまり感じないまま成長してきた気がします。「家＝すまい」は人にとって第一の居場所であるのに、です。今回はまったく違う２つのタイプの「すまい」の話を聞くことができましたが、実は人や暮らしに寄り添った「すまい」であるという意味では、同じ部分を持っています。昔ながらの暮らしも見直したいし、これからの住まい方も考えていきたい、参加者の皆さんもそう感じてくださったのではないでしょうか。「すまい」を考えることは、日々を健やかにすることにつながる、そんな気がします。（な）

今後のシェアラボは・・・

次回は「つたえる」
を予定しています。
2015 年度も引続き開催！

シェアラボについてのご意見・お問合せは…
seijuku@otemon.ac.jp（担当：中川）まで !!

追手門学院
成熟社会研究所
〒540-0008
大阪市中央区大手前 1-3-20
追手門学院　大阪城スクエア内
TEL：06-6948-5835
FAX：06-6948-5836

○茨木キャンパス内分室
〒567-8502
大阪府茨木市西安威 2-1-15
研究棟１階 107 号